

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02724

研究課題名(和文) 教員養成における授業実践コンピテンシーと教育学コンテンツの結合

研究課題名(英文) Combining classroom practice competencies and pedagogical content in teacher training

研究代表者

高木 啓 (Takaki, Akira)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：90379868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：4年間の本課題の研究期間のうち前半の2年間は主に、教育方法学に関する教員養成テキストを分析の対象として、それらに内在するコンテンツとコンピテンシーの抽出、ならびにその両者間の結びつきの検討を行った。

後半の2年間は、前半の2年間の成果を受けて、教育方法学領域における教育実践コンピテンシーの射程を定め、そのコンピテンシー育成に求められる教育学のコンテンツとはどのようなものを明らかにする作業に着手した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学や地方自治体といった様々なレベルで教員養成段階において身につけられておくべき資質能力(コンピテンシー)が提起されている。他方で、教職課程をはじめとする大学の授業や教育学などの教師教育教材はコンテンツベースでデザインされているものが多い。そのこと自体に問題があるわけではないが、コンテンツの裏付けのないコンピテンシー、コンピテンシーにつながらないコンテンツというそれぞれ独立している現状があることに課題を設定し、それらの架橋を試みたところに本研究課題の意義がある。

研究成果の概要(英文)：During the first two years of this four-year research project, we mainly analyzed teacher training textbooks on educational methodology, extracted the contents and competencies inherent in them, and examined the connections between them.

In the latter two years, based on the results of the first two years, the scope of educational practice competencies in the field of educational methodology was defined, and work began on clarifying what kind of pedagogical content is required to cultivate such competencies.

研究分野：教育方法学

キーワード：教育方法学 教員養成

## 1. 研究開始当初の背景

日本のみならず、世界各国の教育政策において、質の高い教育を担うことのできる教師の養成・研修の改革が中心的課題となって久しい。それぞれの国の社会情勢や学校制度に応じてその改革の内容は異なった部分も多く含まれるものではあることは言うまでもないが、PISAを契機として、各国の教師教育改革が共通化する傾向も多く見受けられるようになった。それはとりわけ、教師教育(教員養成)スタンダードや育成指標の明確化、それらに基づく養成・研修の一貫性の確保といった点に象徴されている。教師教育の「高度化」を目指した教職大学院の開設・拡大、教員免許更新制の導入、教職実践演習の義務化といった改革が矢継ぎ早に打ち出され、現在は「教職課程コアカリキュラム」が導入され、教員養成段階において教員志望者に獲得させるべきコンピテンシーの基準を明確にしようという流れが進められている日本もまたこれらの流れのなかにいた。

教員に求められるコンピテンシーや専門職性を政策主導で規定されることには多くの批判的意見もあるものの、コンピテンシーベースで、教職の専門職性を保証しようという流れ自体は説得性を持って世界的にも受け入れられていると言えよう。しかしながら、教師教育の現場に身を置く応募者が、この点に関して課題と捉えているのは、そのコンピテンシーとコンテンツとの関係性である。つまりはコンテンツと独立したものとしてコンピテンシーが捉えられている現状があるのではないかと、という点であった。

教員志望者にとって、求められる能力像がどのようなものかを考えるうえで、教員採用試験の影響は大きい。教員採用試験を「突破する」という目標のためには、教職教養などの試験科目で測定されるコンテンツと、模擬授業や場面指導などで測定にされるコンピテンシーとは、別物として多くの教員志望者は捉えている。コンテンツは暗記、コンピテンシーは模倣、と、いずれも再生的な学習が繰り返されている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバルレベルでの教師教育の改革が展開されているなかで、コンテンツとリンクしたコンピテンシーを育成するため、これまでの教師教育教材(教師教育テキスト)では、どのようなコンピテンシーを意図してそれぞれのコンテンツを配列しているのか、そして、コンテンツとコンピテンシーの両者の結びつきはどのように捉えられているのかを明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

これまで展開されてきた教師教育改革の動向を整理するとともに、これまで刊行されてきた教師教育テキストの分析を行った。具体的には、教員志望者にどのような知識を獲得させ(コンテンツ)、どのような思考を喚起させようとしているのか、そのうえでどのような能力をつけさせようとしているのか、さらには両者の関係を分析する。

## 4. 研究成果

わが国における教育方法学に関するテキストに内在するコンテンツならびにコンピテンシーの抽出を行った。その際、コンテンツやコンピテンシーを複層的に捉えるために、領域とテキストという二つの観点からその抽出は実施された。前者は、学力や学級経営論などの領域ごとに抽出を実施することで、ある領域におけるコンテンツ・コンピテンシーにテキスト間でどのような共通点や差異があるかを浮かび上がらせるという観点である。後者はテキストごとに抽出を実施することで、テキスト全体でコンテンツやコンピテンシーがどのようにデザインされているかという観点である。

海外におけるテキストに関しては、テキスト分析の予備作業として、近年の教師教育の動向を調査した。調査対象国の一つであるドイツならびにアメリカとした。ドイツについては、ライプツィヒに渡航して調査を実施することができた。そこでは教員養成段階、現職研修段階での授業参観も実施し、部分的ではあるが教師教育の現状を調査することができた。

この間実施してきた教育方法学テキストの分析については、教育方法学領域におけるスタンダードなテキストのうち、佐藤学(2010)『教育方法学』左右社、田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤村宣之(2019)『新しい時代の教育方法』有斐閣、深澤広明編著(2014)『教育方法技術論』協同出版、樋口直宏編著(2019)『教育の方法と技術』ミネルヴァ書房、小室弘毅・齋藤智哉編著(2019)『ワークで学ぶ教育の方法と技術』ナカニシヤ出版の5冊を調査の対象とし、それぞれにみられるコンテンツ、コンピテンシーそしてその両者の結びつきを比較検討した。具体的には、コンピテンシーと結びついていないコンテンツ、あるコンピテンシーとは結びついていないものの単一のコンピテンシーとしか結びついていないコンテンツ、多様なコンピテンシーとの結びつきが見られるコンテンツ、という三種類のコンテンツ群へと分類をした。

分析結果は以下の通りである。

多くのテキストで記載のあったタームは共通集合に属する、いわば基礎教養として位置づけ

られているコンテンツであるが、これらのコンテンツが基礎教養となっている、そのよりどころには教師に求められるコンピテンシーとの関連が含まれているからではないか、という推測のもとに調査を行ったものの教育方法学の基礎教養的な概念として定着しているコンテンツだからといってコンピテンシーにつながっている、といった具合に一概に位置づけられているわけではないことが明らかとなった。

しかし、コンピテンシーに結びついていないコンテンツのなかには克服された過去の遺産としてのコンテンツが含まれ、同じ轍を踏まないため、もう一方の理論や実践の位置づけを明確化するため、などの学ぶ意義を含む克服されたコンテンツの必要性を、論争的に進み深められてきたという教育（方法）学の理論的特質とともに明らかにした。

また、どれだけのコンピテンシーに結びついているかの多寡は、そのコンピテンシーの多様性というよりもむしろ、援用されている領域の多寡と関連していることが明らかとなった。単一のコンピテンシーと結びついているコンテンツは、明確に評価論や集団論といった単一の領域に位置づけられるものであった。それに対して、複数のコンピテンシーとの結びつきが見られたコンテンツは、いずれも授業論や子ども論、教師論など、複数の領域のコンピテンシーと結びついていた。そして、そこで見られたそれぞれのコンピテンシーは、教育という営みを、例えば学校論で切り取るか、授業論で切り取るかといった切り口による差異であり、別々のものというわけではなく相似的關係のようになっている。

教育学コンテンツと教育実践コンピテンシーの関連の分析を、ICT活用に関わって先行的に実施した。戦後、教育方法・技術領域のテキストにおいて、ICT機器、視聴覚機器、情報機器、教育メディアの活用に関わってどのような資質能力が教師に要請されてきたかを分析した。教職課程におけるICT活用に関する内容の充実への要求が高まっている今日の状況を背景として、ICT活用にかかわる教師の指導力がどのようなものとしてとらえられてきたのかを歴史的に明らかにし、その変遷をふまえて今日どのような課題が残されているかを考察した。結果、新たなコンピテンシーが求められているというよりも、様々なコミュニケーションについての従来から求められてきたコンピテンシーの根源的な捉え直しの契機として、教育方法学テキストでは、教育メディアを捉えていることが明らかとなった。

以上の分析をもとに、今日求められている教育実践コンピテンシーに関する先行研究を分析した。そのなかで岩田康之・別惣淳二・諏訪英広編(2013)『小学校教師に何が必要か - コンピテンシーをデータから考える』東京学芸大学出版会をはじめとした先行研究で示されているコンピテンシーのうち、本課題の領域である教育方法学に関連する範囲を設定し、研究成果としてまとめるコンピテンシーを選択した。具体的には、「子ども理解に関する領域」、「子どもに対するコミュニケーションに関する領域」、「授業計画に関する領域」、「学習指導に関する領域」、「学級経営に関する領域」、「授業改善に関する領域」の5つの領域である。それらの領域をそれぞれ詳細に分析し、「子どもを成長する／変わりうる存在として理解することができる」、「子どもと対話的にコミュニケーションすることができる」、「陶冶価値の観点から教科内容を理解することができる」、「授業のねらいに応じてメディアを活用することができる」、「子どもが学習主体となるような指導ができる」、「目的に合致した授業研究を行うことができる」、「学級内において民主的な機能的集団づくりができる」、「子どもの育ちを促す学習評価を行うことができる」という9つのコンピテンシーにまとめた。その上で、それらのコンピテンシーを育成するために知っておく必要のある教育学コンテンツ(教職教養)を明らかにし、そのコンテンツを含んだテキストとして、出版する予定としている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 YAMAMORI KOYO, OKADA RYO, YAMADA TSUYOSHI, WATARI YOICHI, KUMAI SHOTA, OKADA KENSUKE, SAWADA EISUKE, ISHII TERUMASA	4. 巻 60
2. 論文標題 What Could the Statistical Synthesis of Research Findings Contribute to the Disciplined Inquiry for Education?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Annual Report of Educational Psychology in Japan	6. 最初と最後の頁 192~214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.60.192	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 樋口裕介、高木啓、熊井将太、吉田茂孝、北川剛司、山岸知幸	4. 巻 71
2. 論文標題 ICT活用に関わる指導力の変遷と今日的課題 - 教育方法学テキストの分析 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 熊井将太	4. 巻 3
2. 論文標題 教授学はいかに希望を語りうるか エビデンス主義を超えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育方法学研究室紀要	6. 最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 北川剛司	4. 巻 14
2. 論文標題 観点別評価の論点整理 「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の実質化に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 81-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北川剛司	4. 巻 13
2. 論文標題 G. Hughesのイプサティブ ( ipsative ) 評価論に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている ( また、その予定である )	国際共著 -

1. 著者名 高木啓、吉田茂孝、樋口裕介、北川剛司、熊井将太、山岸知幸	4. 巻 66
2. 論文標題 教育方法学テキストの比較分析 - コンテンツとコンピテンシーとの関係 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 263-273
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口 裕介	4. 巻 65
2. 論文標題 陶冶履歴研究 ( Bildungsgangforschung ) における学習者の参加に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 588-593
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川口 俊明、松尾 剛、磯部 年晃、樋口 裕介	4. 巻 15
2. 論文標題 項目反応理論と潜在クラス成長分析による自治体学力調査の再分析 算数・数学の学力格差とその変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本テスト学会誌	6. 最初と最後の頁 121 ~ 134
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) 10.24690/jart.15.1_121	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている ( また、その予定である )	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉田茂孝
2. 発表標題 インクルーシブ教育における授業集団の検討 - アクティブ・ラーニングに焦点をあてて -
3. 学会等名 中国四国教育学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木啓、吉田茂孝、樋口裕介、北川剛司、熊井将太、山岸知幸
2. 発表標題 教育方法学テキストの比較分析 - コンテンツとコンピテンシーとの関係 -
3. 学会等名 中国四国教育学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 熊井 将太
2. 発表標題 エビデンスに基づく教育の社会的・学術的影響
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊井 将太
2. 発表標題 学習の個別化と学級授業との関係性 その歴史と現在
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口 裕介
2. 発表標題 陶冶履歴研究 (Bildungsgangforschung) における学習者の参加に関する考察
3. 学会等名 中国四国教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田 茂孝
2. 発表標題 現代ドイツのインクルーシブ授業におけるグループでの学びに関する研究 戦後からのグループの特質の変遷を中心に
3. 学会等名 中国四国教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 Jongsung Kim, Nariakira Yoshida, Shotaro Iwata, Hiromi Kawaguchi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 219
3. 書名 Lesson study-based teacher education : the potential of the Japanese approach in global settings	

1. 著者名 湯浅 恭正、福田 敦志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 子どもとつくる教育方法の展開	

1. 著者名 樋口直宏, 吉田成章	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 211
3. 書名 教育方法と技術・教育課程	

1. 著者名 湯浅恭正、新井英靖	4. 発行年 2021年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 156
3. 書名 Pedagogy of Cooperative and Inclusive Learning in Japan	

1. 著者名 西岡加名恵、石井英真	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 262
3. 書名 教育評価重要用語事典	

1. 著者名 石井英真	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 流行に踊る日本の教育	



1. 著者名 日本教育方法学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 160
3. 書名 公教育としての学校を問い直す	

1. 著者名 深澤広明、吉田成章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 192
3. 書名 学習集団づくりが育てる「学びに向かう力」 授業づくりと学級づくりの一体的改革	

1. 著者名 杉田浩崇、熊井将太	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 340
3. 書名 「エビデンスに基づく教育」の闘いを探る	

1. 著者名 佐々木 正治	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 202
3. 書名 新中等教育原理〔改訂版〕	

1. 著者名 久田 敏彦、ドイツ教授学研究会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 360
3. 書名 PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革	

1. 著者名 新井英靖、今井理恵、小川英彦、櫻井貴大、佐野友俊、高井和美、高橋浩平、堤英俊、手塚知子、廣内絵美、廣瀬信雄、湯浅恭正、吉田茂孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 アクティブ・ラーニング時代の実践をひらく「障害児の教授学」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	熊井 将太 (Kumai Shota)  (30634381)	山口大学・教育学部・准教授  (15501)	
研究分担者	山岸 知幸 (Yamagishi Tomoyuki)  (60304375)	香川大学・教育学部・教授  (16201)	
研究分担者	吉田 茂孝 (Yoshida Shigetaka)  (60462074)	大阪教育大学・教育学部・准教授  (14403)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	樋口 裕介 (Higuchi Yusuke)  (80587650)	福岡教育大学・教育学部・准教授  (17101)	
研究分担者	北川 剛司 (Kitagawa Takeshi)  (80710441)	奈良教育大学・教職開発講座・准教授  (14601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関